

聖書：マタイ 22：1～14

説教題：招かれる人は多いが

日時：2020年3月22日（朝拝）

今日はイエス様が話された「結婚披露宴のたとえ」を見て行きます。21章28節以降、3つのたとえ話が連続して語られています。いずれもまことの王としてエルサレムに入城されたイエス様を受け入れない祭司長や長老たちに対して語られたものです。一つ目は21章28節からの「二人の兄弟のたとえ」、2つ目は21章38節からの「悪い農夫たちのたとえ」、三つ目が「結婚披露宴のたとえ」です。基本的に同じメッセージが語られています。今日のたとえを見て行く中で、先に見た二つのたとえも折々に振り返りたいと思います。

さて2節が「天の御国は」と始まっていますように、これはイエス様がもたらしている天の御国についてのたとえです。その天の御国は結婚披露宴にたとえられています。改めてここに神が招き入れてくださる世界は結婚披露宴にたとえられる喜びで特徴づけられるものであることを知ります。私たちは信仰生活をいつのまにか、私たちが神のために一方的に働く世界のように思っているかもしれません。私が頑張り、色々なことを我慢して、神に仕え、一方の神は私たちに仕えてもらって高いところで「よし、よし」と言っておられると。しかし聖書のメッセージは違います。天の御国は神が私たちを食卓に招き、もてなし、祝福してくださるという世界です。このことは旧約聖書から言われて来ました。イザヤ書 25 章 6～9 節：「万軍の主は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。この山の上で、万民の上をおおうべールを、万国の上にかぶさる覆いを取り除き、永久に死を呑み込まれる。神である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。主がそう語られたのだ。その日、人は言う。『見よ。この方こそ、待ち望んでいた私たちの神。私たちを救ってくださる。この方こそ、私たちが待ち望んでいた主。その御救いを楽しみ喜ぼう。』」 またマタイの福音書 8 章 11 節：「あなたがたに言いますが、多くの人が東からも西からも来て、天の御国でアブラハム、イサク、ヤコブと一緒に食卓に着きます。」 また 9 章 15 節でイエス様はご自身の到来は花婿の到来にたとえられるものであり、イエス様とともにいることは結婚披露宴の喜びにたとえられるようなものであると言われました。もちろん私たちはただ仕えてもらうだけではなく、私たちも仕えます。人の主な目的は、ウェストミンスタ

一小教理問答で教えられているように、神の栄光を現し、神を永遠に喜ぶことです。しかし私たちがすることはあくまでも神の恵みに対する応答です。神の恵みがベースです。私たちは信仰生活の本質は何か、天の御国で私たちを待っている生活は何かを改めてこのたとえを通して心に留めたいと思います。

しかしでした。このたとえの中で、招待した客が来ない！ということが言われます。当時、祝宴を行う時は、お客さんを前もって招待しますが、準備が整ってからしもべたちが案内して回るといった慣例があったようです。すでに「行きます」という意思表示をしていたお客さんなのに、いざ準備ができましたと告げると来ようとしません。これは誰のことなのでしょう。これは直接的にはイスラエルの人々、特にそのリーダーたちのことです。一つ目の「二人の兄弟のたとえ」における弟がそうでした。「行きます！お父さん」と最初は言いながら、結局行かなかった。あるいは二つ目の「悪い農夫たちのたとえ」における農夫たちもそうでした。ぶどう園の主人に雇われ、働かせてもらっていたのに、主人がしもべを遣わすと拒否する。今日のたとえでも、王はすぐに怒って報復することはしません。もう一度、別のしもべたちを遣わし、彼らにこう言わせます。「私は食事を用意しました。私の雄牛や肥えた家畜を屠り、何もかも整えました。どうぞ披露宴においでください。」ここに王にたとえられている神の忍耐と寛容が示されています(21章36節参照)。ところが人々が取った態度は、それを気にもかけないということでした。5節に「ある者は自分の畑に、別の者は自分の商売に出て」行ったとあります。これは一言で言えば、この世の生活のことで頭が一杯だったということです。結婚披露宴という特別の機会に招かれているにも関わらず、いつもの自分たちのすることへと向かって行く。さらに残りの者たちは、6節に「王のしもべたちを捕まえて侮辱し、殺してしまった」と言われています。王が繰り返し、しもべを遣わして来ることをうるさい！と思ったのか、邪魔だ！と感じたのか。自分たちは自分たちのしたいことをしたいんだ！そういう思いからだったのか。明らかな拒絶であり、反抗です(21章35節、39節参照)。

そこで王はついにこのような人々をさばきます。神の忍耐と憐れみはいつまでもあるのではないということです。恵み深い招きを退け続けるなら、こういう結果が待っているのです(21章40～41節参照)。

さて、こうして先に招かれていた人々が拒絶したことによって新しい展開が生じます。

王は代わりの人々を招こうとします。王は言います。「披露宴の用意はできているが、招待した人たちはふさわしくなかった。だから大通りに行って、出会った人をみな披露宴に招きなさい。」ここで先に招かれた人たちが「ふさわしくなかった」と言われているのは、彼らが招きに応答しなかったからです。反対から言えば、ふさわしい人とは神の招きに応答する人であるということになります。その招きに応答する人なら、どんな人でも招き入れて良い。大通りに出て行って出会ったすべての人を招きなさい！と王は言います。その結果、良い人も悪い人も、この披露宴の会場に来ます。この「良い人」と「悪い人」とは、人間の基準で考えて「良い人」と「悪い人」のことです。ここに福音は人間的に良い人か悪い人かは問わないということが示されています。一つ目のたとえでも21章31節で「取税人や遊女たちが先に神の国に入る」と言われました。神の国とは関係がないと思われていた人々、決して神の国には入れないだろうと思われていた人々が、神の恵み深い招きを受け入れ、先に入る！またこれは今後の異邦人の救いをも指し示しています。先に招かれたユダヤ人の多くが退けることによって、その外にいた異邦人が招き入れられる。これは確かに今日の私たちのことです。私たちはもともと神の約束を受けていた者たちではなく、ただ通りを歩いていただけのような者でした。しかし神が遣わしたしもべを通して祝宴へと招かれました。決して良い者とは言えず、むしろ悪い者であるにもかかわらず、ただ恵みによって神が招いてくださったので私たちは今日ここにいます。

しかし最後にもう一つの話が続きます。11節に婚礼の礼服を着ていない人が一人いたと書かれています。王は彼に「友よ。どうして婚礼の礼服を着ないで、ここに入って来たのか。」と問います。準備しようと思えばそれができたはずなのに、そうしなかった彼の責任を問う言葉です。それに対して彼は黙っていました。もし事情があれば、例えば突然この場所へ招かれて礼服の準備をする時間がありませんでした！とか、貧しくてそのような服は用意できませんでした！ということであつたら、そう述べれば良かったでしょう。しかし彼は黙っていました。それは言い訳できることがなかったということでしょう。そこで王は召使いたちに「この男の手足を縛って、外の暗闇に放り出せ。」と命じます。そこで彼は泣いて歯ぎしりすることになります。これは何を意味しているのでしょうか。特にこの礼服は何を象徴しているのでしょうか。これが難しいところです。

私もしばしばこれまで聞いて来ましたし、おそらく皆さんも聞いて来たであろう一つの解釈は、この礼服はキリストへの信仰を通して与えられる義のことだというものです。

いわゆる信仰義認の義のことであると。この祝宴場には良い人も悪い人も入ることができましたが、その人に求められる唯一の条件はキリストの義を受け取ることであると。そしてよく言われるのは当時、宴会が催される場合、入口でふさわしい礼服が渡されることがあったという説明です。つまり私たちは自分で用意する必要はないが、神が無償で与えてくださる義の礼服を着ること。これだけが天の御国に入る条件である。しかしこの男はそれを拒否した。そこでこの人はこの宴会場から追い出されたのだという解釈です。しかし多くの学者たちは、そういう示唆はここにはないとコメントしています。確かにこの話の前後を見ても、そういうメッセージが語られてはいません。そしてこのテキストがそのヒントを与えていないなら勝手な推論や思弁的解釈は避けるべきであると述べています。

そのアドバイスを受け止めつつも、もし一つの理解を一つの可能性として提示すべきであるなら、いくつかの注解書を読みながら蓋然性があると思われたのは次の理解です。そのためのカギは、連続する3つのたとえ話のつながりの中で理解するように努めることです。一つ目の「二人の兄弟のたとえ」では、先に神の国に入ると言われた取税人や遊女たちは「ヨハネが示した義の道を信じた」（21章32節）と言われていました。ヨハネが示した義の道とは、単にイエス・キリストを信じるということだけでなく、イエス・キリストの恵みを受けて実際に義の道を歩くこと、義の生涯へ進んで行くことを意味しています。彼らは福音に接して、それまでの自分たちの生き方を思い直して新しい生活へと進んで行きました。また二つ目の「悪い農夫たちのたとえ」において、21章41節で「収穫の時が来れば収穫を納める別の農夫たちに貸すでしょう」と言われ、43節ではその人々のことが「神の国の実を結ぶ民」と言われていました。ここでもただ信じることでなく、「実」を結ぶことが大事なポイントとして言われていました。そう言えば、少し前の枯れたいちじくの木のお跡において、当時のエルサレムが葉っぱは茂っていても実がさっぱりないこと、それゆえにさばかれるべきことを示していました。そしてより広くマタイの福音書全体に目をやると、マタイの特徴的なメッセージとして5章20節の次のイエス様の言葉を思い起こします。「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」ここでもただ信じる信仰だけでなく、パリサイ人らに勝る本当の義の生活、神に御心に沿う正しい生活の必要性が述べられていました。同じ山上の説教の7章20節でも「こういうわけで、あなたがたは彼らを実によって見分けることになるのです」と言われて、「実」が本物と偽物を見分ける印となることが言われまし

た。これらのことを考えると、この礼服は本当の神の民のしるしとなるものであり、先のたとえでも語られた神の国の民が持つある種の「実」を暗示しているのではないかと  
いうことです。またヨハネの黙示録19章8節の次の御言葉も参考になります。「花嫁は、  
輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行い  
である。」やがての天の御国に入る時、キリストと結ばれて歩んだ者は「正しい行い」  
という輝く、聖い亜麻布をまとう者とされます。しかし今日の箇所、祝宴が始まる時  
に王が見ようとしたら、それを着ていない人がいた。つまりその人は偽りの信者であつ  
た。その人はこの会場に混じってはいましたが、神の民が持つべきしるしは持っていま  
せんでしたから、この祝宴にあずかることはできないのです。その人は追い出されるこ  
とになるのです。

最後14節はこのような言葉でまとめられています。「招かれる人は多いが、選ばれる  
人は少ないのです。」今日のたとえでは、神は多くの人を招いてくださっているが皆  
がそれに応答するわけではないということが語られて来ました。とするならこの14節  
は「招かれる人は多いが、応答する人は少ない」と言う方がすっきりするようにも思ひ  
ます。しかしその最後は「選ばれる人は少ない」という言い方になっています。一見、  
不思議な言い方ですが、ここに「神の選び」と「人間の責任」についての含蓄ある聖書  
のバランスがあると思います。聖書ははっきりと神の選びがあると語っています。ある  
人々はこの教理を嫌い、何かと文句をつけようとします。しかしこの14節にも見られ  
ますように、聖書は神の選びと人間の責任を対立したり、矛盾するものとは見ていま  
せん。むしろここから分かることは神の選びは人間の行動を通して明らかにされるとい  
うことです。ここで神の招きにふさわしく応答した人が、選ばれた人と言われています。  
ですから私たちは自分のすべきことをしないで、ただ神の責任だけを問うような  
論じ方はできないのです。むしろ私たち自身が神の招きに一生懸命応答することとセッ  
トで、神の選びについて思いを巡らし、またこれを確信するように努めて行くべきな  
のです。そして同時に覚えさせられることは、私たちとしては神の招きに応答するこ  
とが必要ですが、だからと言って応答した自分を誇ることはできないということです。  
なぜならその人は神に選ばれたと言われているからです。その人にそれができたのは、神が  
選んで恵みを注いでくださったからです。ですからこの14節の言葉を通して、私たち  
は神の恵みに思いを向け、神にすべての良いことについて栄光を帰さなければならない  
ということを教えられるのです。

今日のたとえを通して改めて思わされることは、私たちは神の恵みによって結婚披露宴にもたとえられる天の御国の祝福へ招かれているということです。私たちはただ通りを歩いていただけのような者であったのに、神の使いを通して招かれてこうして主のもとへと導かれました。この恵みを感謝したいと思います。しかし 14 節の言葉にもう一度注目するなら、「招かれる人は多いが」と言われていました。つまり、招かれているということだけで満足してはならないということです。招かれていることイコール救いではない。神が招いてくださっていることと私たちがそれに応答することとは別のことです。招かれていることに満足するのではなく、その招きを受け取って、神との真実なつながりの中に生きることが大切なことなのです。神はこの天の御国の祝宴に私たちを招き入れるために御子キリストを遣わしてくださいました。この方を受け入れ、この方に従って歩む時に、私たちはやがて御国の祝宴に入る時、ふさわしい礼服を着る者とされます。そうして結婚披露宴にもたとえられる永遠の喜びに満ちた生活へと導かれます。その日が来ることを楽しみに見つめながら、キリストに聞き、キリストにつながり、この方に従う歩みへ進みたいと思います。そしてやがての日にはただ神の恵みにより、そのように導かれたことを感謝し、すべての栄光を神に帰して天の大祝宴へと入れられて行く、幸いな神の民の歩みへ導かれて行きたいと思います。